

## 第4章 中期留学プログラムの目指す英語力

—第5期生の選抜時と帰国後のTOEICの結果から—

笠原正秀

### はじめに

本章では、「中期留学プログラムの目指す英語力」と題し、中期留学第5期生(2006年度)の選抜時と帰国後の英語力の変化をもとに、以下の4点から本プログラムの目指す英語力について考えてみたい。

最初に、「中期留学」という発想の原点を振り返り、本プログラムにおける「英語力の向上」の位置づけを明示し、選抜時と帰国後の英語力の変化の測定に利用しているテストの変遷について簡単に触れる。次に、第5期生の選抜時と帰国後の英語力の伸長について、テスト結果をもとに述べる。3点目は、選抜時と帰国後の英語力の変化にみられる関係性について述べる。最後に、これまで蓄積してきた、第1期生から第4期生の選抜時と帰国後の英語力の変化と第5期生の場合とを比較し、そこから何が見えるのかを今後の課題として提示する。

以上の4点から、第5期生の英語力の向上を基軸に、そこから本プログラムの目指す英語力について検討したいと考える。

### 中期留学の目的と英語力の向上

中期留学の目的の1つに「英語力の向上」という側面がある。中期留学はいわゆる「語学留学」である以上、この点が核であると言っても過言ではない、と個人的には考えている。もちろん、異文化体験や様々な国から来た学生たちと交友関係を築くという側面も留学生活を送る上で非常に重要であることは否定しないし、そうしたことが人生において人的財産の拡充という意味で非常に大切であることもたしかである。しかし、目に見える形で、客観的、かつ即時的に、この6か月間の成果を見ることができるのは、「英語力」ではないだろうか。

そもそも「中期留学(6か月)」という、「短期語学研修(1か月)」や交換留学等の「長期留学(1か年)」ではない発想の背景には、もちろん、各家庭にかかる経済的負担<sup>1</sup>も議論の大きなポイントではあったが、英語力を伸ばすということに関しては、「1か月では何もできない」、「私費での1年間はあまりにも費用が嵩み過ぎる」、かと言って、「交換留

<sup>1</sup> 1か月の語学研修でも50-60万のお金がかかっていたが、その2倍程度の金額で、半年間、現地で生活をしながら英語の勉強に専念できるという見通しがあった。しかし、現実には、学生の個人的な出費(現地での旅行等)により、平均して200万以上のお金が、保護者の負担となっているようである。

〔図表1〕 中期留学生(2006年度)の英語力の伸長結果  
 —選抜時の TOEFL および帰国後の TOEIC の結果から—

人数	選抜時(TOEFL ITP)				TOEIC 換算	帰国後(TOEIC IP)			TOEFL 換算
	I	II	III	Total		Listening	Reading	Total	
1	50	50	50	500	590	455	425	880	603
2	50	40	44	447	440	460	365	825	583
3	45	42	50	457	469	460	340	800	574
4	45	39	41	417	356	425	330	755	558
5	49	45	41	450	449	435	295	730	549
6	40	45	44	430	392	390	325	715	544
7	41	43	50	447	440	435	265	700	539
8	49	47	43	463	486	390	295	685	534
9	41	41	37	397	299	410	265	675	530
10	46	50	44	467	497	350	315	665	526
11	45	42	37	413	344	350	315	665	526
12	43	45	45	443	429	355	300	655	523
13	38	39	42	397	299	345	300	645	519
14	38	43	43	413	344	365	275	640	518
15	42	50	46	460	477	380	255	635	516
16	42	47	36	417	356	345	285	630	514
17	41	37	45	410	336	380	240	620	511
18	42	43	43	427	384	365	240	605	505
19	41	42	41	413	344	340	250	590	500
20	42	45	43	433	401	395	190	585	498
21	41	50	38	430	392	330	250	580	496
22	44	41	38	410	336	300	260	560	489
23	41	43	42	420	364	345	215	560	489
24	41	40	38	397	299	310	220	530	479
25	43	43	42	427	384	315	195	510	472
26	44	38	42	413	344	330	165	495	466
27	42	42	37	403	316	275	180	455	452
28	43	35	37	383	260	300	155	455	452
29	41	40	38	397	299	240	175	415	438
30	50	45	46	470	505	留学継続中のため未受験			
平均	43.3	43.1	42.1	428.4	387.7	364.7	265	629.7	513.9

学は経済的な側面は抑えられるものの、人数枠に限りがあり、また英語力そのもののハードルが高く、誰でも行けるというものではない<sup>2</sup>。しかし、学部のプログラムとして、6か月間、現地の語学学校に入り、集中して英語だけを勉強することにより、ある程度の英語力の向上が期待でき、かつ保護者への負担も多少なりとも軽減できるのではないかと、という目算があったように思う。

そのため、第1期生から第3期生までは、選抜時および帰国後の英語力の測定には TOEFL ITP<sup>2</sup> (以下、TOEFLと記す) を用いてきた。しかし第4期生と第5期生は、選抜時においては、これまでと同様 TOEFL を利用し、帰国後の英語力の測定には TOEIC IP<sup>3</sup> (以下、TOEICと記す) を利用することになった<sup>4</sup>。理由は、日本国内における社会的認知度や、その後の利用できる幅を考慮した結果、TOEFL よりも TOEIC の方が、汎用度が高いということで、テストの切り替えが決まった。そのため、第5期生の英語力は TOEFL、TOEIC 両方の基準で見ることができるよう [図表1] を作成した。後で見るグラフに関しては、TOEIC を基準とし、選抜時の TOEFL の点数は TOEIC に換算したものを使っている<sup>5</sup>。

### 第5期生の選抜時と帰国後の英語力の変化

全体の平均を見ると、選抜段階では TOEFL で 428. 4 (TOEIC 換算 387. 7) であったものが、帰国後 (2007年5月) は、TOEIC で 629. 7 (TOEFL 換算 513. 9) に伸びている。単純に見れば、TOEIC 基準で 242. 0 (TOEFL 基準で 85. 5) の伸びを示したことになる。第5期生 29名<sup>6</sup>、皆英語力を伸ばしたと高く評価できそうな点数の伸びを示している。

次の [図表2] のように、大学別の伸びに関しても、あくまでも平均ではあるが、6か月間の成果として、どの学校も大きく点数を伸ばしていることがわかる。具体的な数値の伸びに関しては、各校あたりの人数に幅があるので、その平均を一律に比較することは、ここでは避けたい。しかし、いずれの学校も、選抜時よりも点数を大きく伸ばしていることは一目瞭然である。

<sup>2</sup> 2002年度の中期留学第1期生以来、このプログラムの英語力測定で用いてきた TOEFL ITP は、Level 2 Pre-TOEFL というものである。これは過去に出題された問題の中から、比較的平易な問題ばかりを集めたもので、満点でも、500点にしかならない問題となっている (<http://www.cieej.or.jp/toefl/itp/index.html>)。

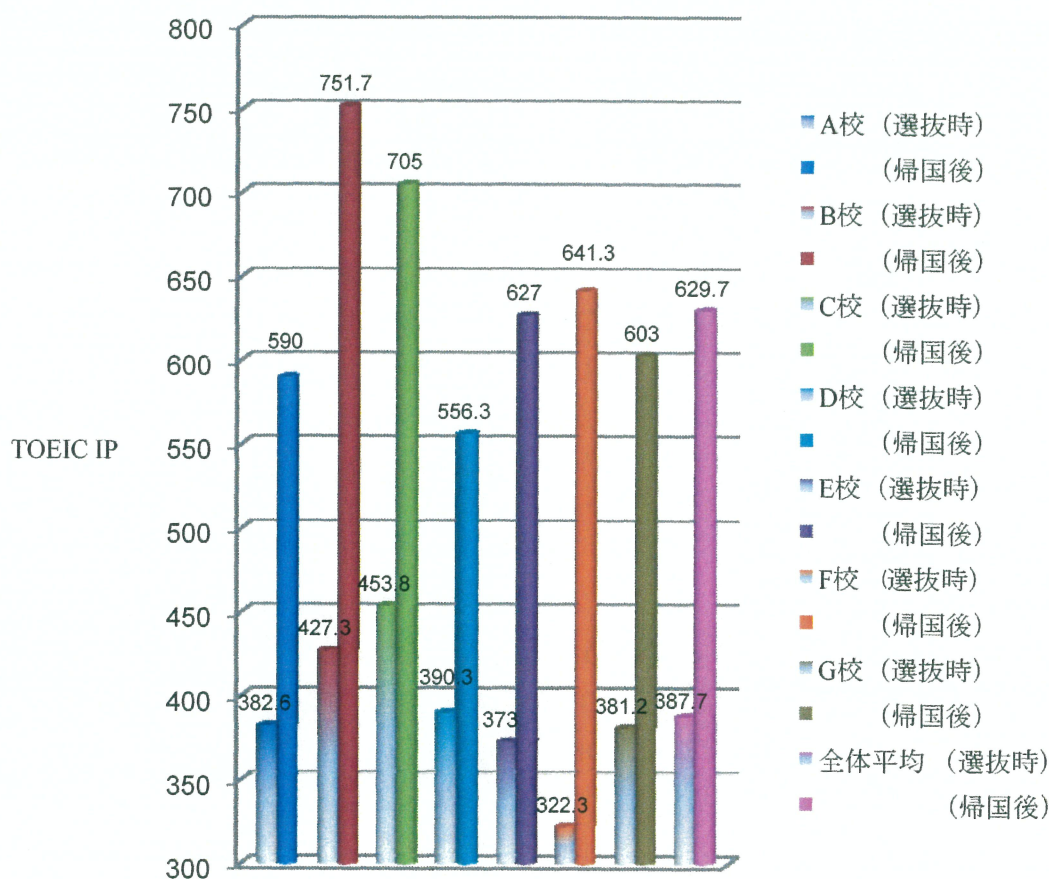
<sup>3</sup> 2005年度生の、帰国後の英語力測定から利用し始めることになった TOEIC IP は、過去に出題された問題であること以外は、まったく TOEIC と同じである。そのため、テスト結果の有効性も通常の TOEIC と何ら変わるものではない ([http://www.toeic.or.jp/toeic/corpo/corpo\\_05\\_01.html](http://www.toeic.or.jp/toeic/corpo/corpo_05_01.html))。

<sup>4</sup> TOEFL を継続して利用していくか、社会的認知度の高い TOEIC に切り替えるかについては、継続性と社会的認知、英語力測定尺度としての適切性の観点から、相当時間をかけて議論していたため、その過渡期に第4期生と第5期生がかかってしまい、選抜時は TOEFL、帰国後は TOEIC という変則的な形になってしまった。

<sup>5</sup> TOEFL と TOEIC の点数換算は、以下のウェブに掲載されていた換算表を参考にしている。詳細については、以下のアドレス (<http://toeic-takoyo.com/toefl/toeictoeiflhyou.html>) を参照のこと。

<sup>6</sup> 第5期生は全員で30名であるが、留学継続中の学生が1名いるため、29名となっている。

〔図表2〕 大学別選抜時・帰国後の英語力の伸長



個別の例に目を転じて見ると、TOEIC で800点台が3名、700点台が4名、600点台が11名、500点台が7名、400点台が4名という内訳になっている。TOEIC と TOEFL の換算表を参考にすると、TOEIC で600点が TOEFL の500点に相当するレベルである。米国の大学を例に挙げれば、理系学部であれば入学許可の出るレベルである<sup>7</sup>。また、本学の交換留学における英語力の目安も500点が1つのラインとなっていると言われている。その意味では、600点以上を収めた18名（第5期生の約62%）に関しては、こちらの期待するレベルに十分到達したと言える。

次に、500点台であるが、STEP英検2級がTOEICの470－500点台に相当するとされている<sup>8</sup>。英検2級のレベルは高校卒業程度<sup>9</sup>であり、大学2年生の後期に行っていることを考えると、若干心もとない気もするが、500点以上、特に500点台後半であれ

<sup>7</sup> もちろんであるが、同じ理系学部であっても、大学により入学許可となる点数が異なる。あくまでも、参考。

<sup>8</sup> <http://www.jipta.net/img/naiyou/image-b.gif> 参照

<sup>9</sup> <http://www.eiken.or.jp/about/index.html> 参照

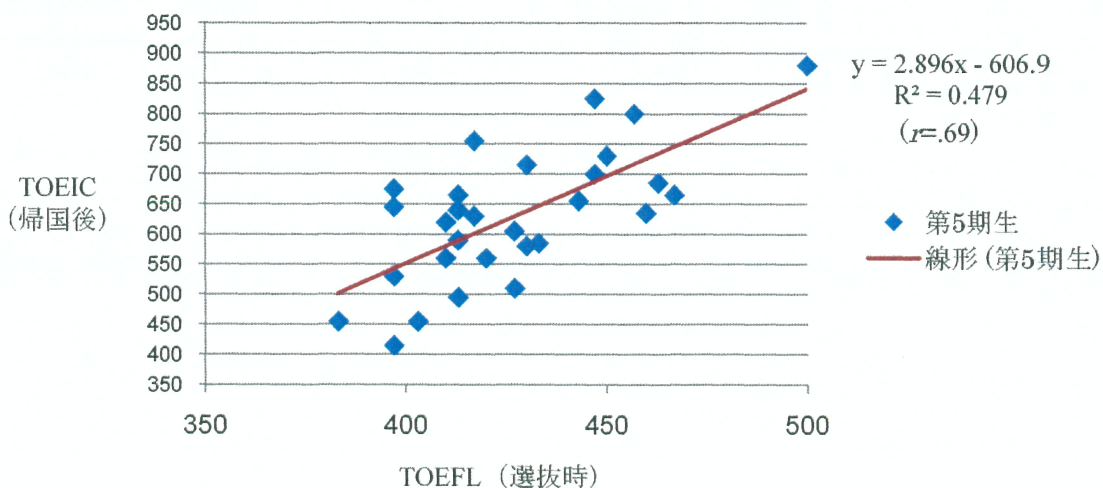
ば、成果としての目安になるのではないかと考える。こうした点を考慮し、2007年度生(第6期生)からは、帰国後のTOEICにおいて500点未満の場合は、単位認定において何らかのペナルティを課すことになった。

400点台のケースでは、個々のデータを見てみると、選抜段階における TOEFL が400点前後(TOEIC 換算300点前後)であり、その時点からの伸びを考えると TOEIC で優に100点以上(TOEFL 換算では50点以上)の伸びを示しており、選抜時よりも大幅に伸びたということについては、大いに評価するところである。しかし、中期留学プログラムが本来期待している目標値からすると、努力の余地がまだあるのではないかと言わざるを得ない。しかしこれは、同時に、我々、選抜する側にも突き付けられている問題としてとらえねばならないことと思う。この点については、次項で提示したい。

### 選抜段階での英語力と帰国後の英語力との関係

[図表3]のように、選抜時に受験した TOEFL の結果と帰国後に受験した TOEIC の結果の間には高い相関関係が示された( $r=.69$ )。また、母相関係数の検定をした結果、帰無仮説( $H_0:\rho=0$ )は棄却された[ $t(27)=4.99$ ,  $\alpha=.05$ での棄却値 2.05,  $\alpha=.01$ での棄却値 2.77]。つまり、選抜時の結果を参考にできるだけの信頼性の高い相関係数であることが確認された。

〔図表3〕 2006年度中期留学生の英語力相関分散図



つまりこれは、「選抜段階で高い点数を取っている者は、帰国後の試験においても高い点数を取っている」ということである。一見、当たり前のことに思えるかもしれないが、視点を変えると、「選抜段階で低い点数だった者は、帰国後の試験においても、やは

り低い点数である可能性が高い」ということである。「あまり低い英語力で留学しても、肝心な英語力そのものがあまり伸びない」ということが言える訳である。

それでは、どの程度の英語力を基準とすべきかであるが、この点については、過去5年間の結果を再分析してみないと現段階において明確な点数を示すことはできない。今後、選抜の基準とする具体的な数値を検討してみる意義は十分あるものとする。

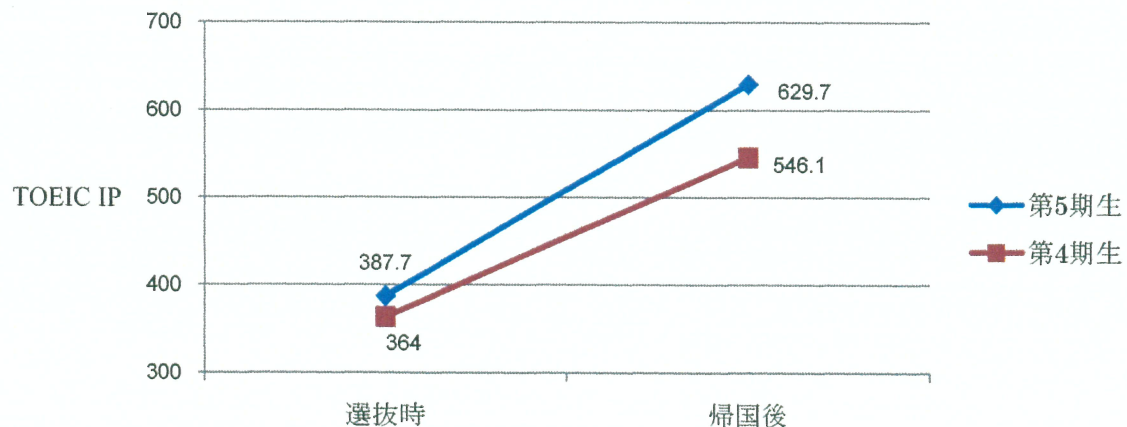
しかし一方、選抜時の TOEFL の結果があまり芳しくなかった者が、必ずしも伸びていない訳ではない。選抜時に TOEFL417点 (TOEIC 換算356点) だった者が、帰国後の TOEIC では、755点に伸びているケースや、TOEFL413点 (TOEIC 換算344点) だった者が、帰国後の TOEIC では665点に伸びているケース等、数は極めて限られてはいるが、何例か目視することができる。そうした伸びる可能性を秘めている学生たちにもチャンスを与えつつ、かつ選抜時の英語力がある程度以上であれば、間違いなく成果をあげられるという基準を見つけ、その両方の学生をすく取りたいところではあるが、なかなか難しいことであろう。

2007年度 (第6期生) より採用する方法で、英語力の伸び (基準) と単位認定との関係を明文化することにより、学生に危機感を持たせ、英語力を伸ばすことに対するモチベーションを高めてもらい、現地での勉強に努力専念してもらおうというのが、現段階では最善の策であろう<sup>10</sup>。

#### 第1期生から第4期生の結果との比較

最初に、状況が極めて酷似している第4期生 (2005年度) の英語力伸長結果と第5期生 (2006年度) の結果とを比較してみたい ([図表4] 参照)。

〔図表4〕 選抜時・帰国後の英語力 (TOEIC) の伸長



<sup>10</sup> 2007年度生 (第6期生) の場合、TOEIC500点以上 (英検2級程度) が目標数値となっている。ただし、選抜段階で500点を超えている学生の場合は、選抜時の点数+30点を単位認定の基準としている。あくまでも私見ではあるが、かかる費用と現地での生活や勉強に費やす時間を考えると、これでも非常に甘い基準であると思う。

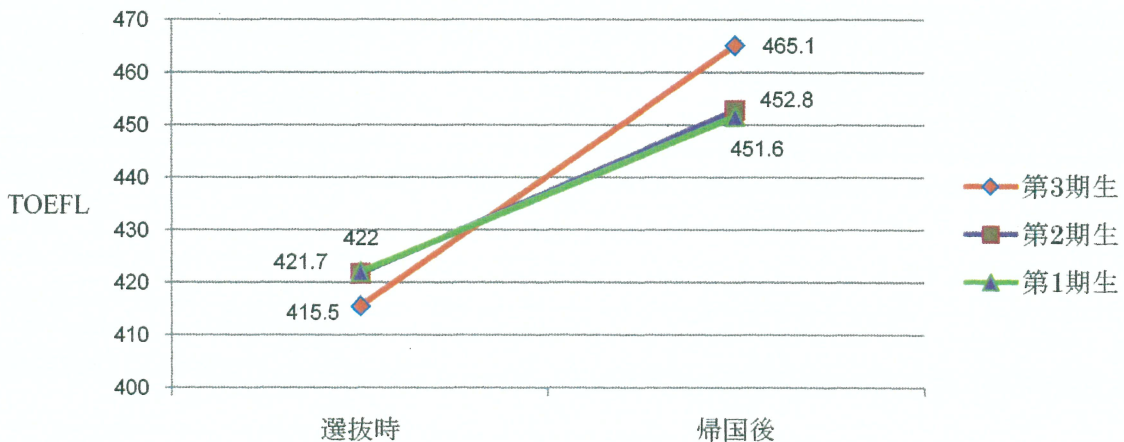
選抜時の平均は、第4期生が TOEFL で420 (TOEIC 換算364)、第5期生は TOEFL で428.4 (TOEIC 換算387.7) であった。双方の集団は、点数的にも、分散においても、統計的には同等であることが確認されている ( $F(2/68)=.86, n.s.$ ;  $t(68)=2.00, n.s.$ )。

しかし帰国後、第4期生は TOEIC で546.1、一方、第5期生は629.7であった。ともに大きく点数を伸ばしてはいるが、両者の間には83.6もの差が生まれている。分散に関しては、両者の間に有意な差は確認されなかったものの ( $F(2/67)=1.40, n.s.$ )、平均点そのものについては、有意な差が確認された ( $t(67)=3.40, ***p<.005$ )。

つまり、4期生と5期生の帰国後の英語力には、グラフで示されているような差が確認されたということである。第4期生・第5期生ともに、選抜段階での英語力に関しては同程度の集団であったにもかかわらず、何がこうした差を生むのであろうか。検討の意義は十分にあると思われる。

次に、同様の事例が、第1期生から第3期生の間にも確認されている ([図表5] 参照)。前出の通り、第1期生から第3期生までは TOEFL を選抜時および帰国後の英語力の測定に用いているので、第4期生、第5期生とは別の枠組みで見たい。

〔図表5〕 選抜時・帰国後の英語力 (TOEFL) の伸長



第1期生、第2期生ともに、選抜時においても帰国後においても、表面的には同じような点数を示しているが (選抜時: 第1期生421.7、第2期生422、帰国時: 第1期生451.6、第2期生452.8、点数の伸び: 第1期生29.9、第2期生30.8)、分散において有意な差が確認された ( $F(2/66)=.31, *p<.05$ )。しかし、平均点については、両者の間に有意な差は確認されていない ( $t(63)=-.18, n.s.$ )。つまり、分散の在り方には差が見られるが、平均点については、グラフが示しているように、両者の間に差はないと

いうことである。

第3期生に関しては、第1期生・第2期生とは異なる直線を描いていることがわかる。選抜段階では、第1期生・第2期生・第3期生ともに、TOEFL の平均点そのものには、有意な差は確認されなかった(第1期生-第2期生間: $t(56)=.07$ , *n.s.*; 第1期生-第3期生間: $t(40)=1.09$ , *n.s.*; 第2期生-第3期生間: $t(62)=.89$ , *n.s.*)。つまり、英語力に関しては、同じ地点からの出発であったと言える。

また、選抜時の分散に関しては、第1期生-第2期生間に有意な差が確認され( $F(2/66)=.31$ ,  $††p<.001$ )、また、第2期生-第3期生間にも有意な差が確認されている( $F(2/58)=.27$ ,  $††p<.001$ )。しかし、第1期生-第3期生間には有意な差は確認されなかった( $F(2/62)=.88$ , *n.s.*)。以上のことから、第1期生と第3期生は非常に似た集団であったことがわかる。

第3期生の帰国後の TOEFL は、465. 1、その伸び49. 6である。第1期生・第2期生と比べて20点近くの大差をつけ、大きく点数を伸ばしている。第1期生の平均と第3期生の平均との間には、統計的にも有意な差が確認された( $t(55)=-2.27$ ,  $*p<.05$ )。また、第2期生と第3期生の平均との間にも有意な差が確認された( $t(59)=-1.78$ ,  $*p<.05$ )。分散に関しては、第1期生-第3期生間には有意な差は確認されなかったが( $F(2/55)=1.16$ , *n.s.*)、第2期生-第3期生間に有意な差が確認された( $F(2/59)=2.31$ ,  $†p<.05$ )。つまり、第1期生・第2期生と第3期生の平均には、グラフが示しているような差がたしかに存在するということである。

これは推論でしかないが、‘現地での生活ぶり’や‘各校における日本人の数’といった点が鍵ではないかと考える。つまり、どれだけ英語環境に身を置き、その地で懸命に生活し、懸命に勉強したかということの証として、点数という形で表れてきていると考える。現在、本プログラムでは、体験的、また感覚的に各校5名を適正人数と判断し、毎年、学生を送り出しているが、‘効果’を考えた時、果たしてこの5名という数そのものの適切性も検証してみる必要性があるのかもしれない。

## おわりに

本章では、「中期留学プログラムの目指す英語力」と題し、中期留学第5期生(2006年度)の選抜時と帰国後の英語力の変化をもとに、本プログラムの目指す英語力について検討してみた。

この約半年間という限られた時間と、そこにかかる費用を考えると、やはり何と云っても‘英語力を伸ばす’というのが、この中期留学の目的の第一義となるべきものではないかと痛感する。もちろん、海外で知り合った日本人や日本人以外の学生と新しい友人関係を築いたり、旅行等により見聞を広めたりすることも大切ではあるが、この半年間の成果を目に見えるものとして測れるのは、やはり‘英語力’ということになろう。その点は、現在、すでに出発している第6期生(2007年度)にも大いに期待したいところである。



最後に、異文化間の人間関係やコミュニケーションを研究している立場から言わせていただければ、‘英語やその他の外国語の力を身につければ、異文化の人々と円滑かつ効果的なコミュニケーションができる’などというのは幻想にすぎないことを、現地ですぐと経験してきてもらいたいものである。個人的には、それがいちばん大切なことかもしれないと思っている。

中期留学をはじめとして、異文化の中で生きることを経験した人には、‘外国語が使えるれば’、あるいは、もっと具体的に、‘英語が使えるれば’、異文化の人々と仲良くにつきり笑って……などというのは幻想であることに早く気付いていただきたいのである。それほどに文化の壁は厚く、異文化の人々と円滑かつ効果的なコミュニケーションを図るには、様々な困難が付きまとうのである。

異文化の中で生きることの厳しさや、異文化の人々とのコミュニケーションの困難さを知ることの方が、英語力をつけることよりもはるかに重要なことであろうと思っている。外国語力、具体的には英語力、を身に付けることは、異文化間のコミュニケーションを効果的にするための一助にはなり得るものであろうが、そのすべてを担うものではないということに早く気付いていただきたいと願っている。